

名詞転換動詞の意味拡張に関する一考察

増淵佑亮

1. はじめに

英語では通常、語がその品詞を変える時には、接辞がつくものである。しかし、語に接辞を付けずに、そのままの形で品詞を変えることもできる。これを転換という。本稿で扱うのは名詞から動詞への転換である。次の例を見てみよう。

- (1) a. to bread “to put bread (crumbs) on something”
b. to fish “to take fish from a body of water”

(Lieber 2010: 49)

名詞から動詞に転換した語を名詞転換動詞と呼ぶが、(1)はその例である。(1a)は元々「パン」という意味の名詞 *bread* であり、(1b)は元々「魚」という意味の名詞 *fish* である。Lieber (2010)によれば、それが動詞へと転換され、「パンを何かにのせる」や「魚を水からあげる」という意味になっている。

こうした名詞転換動詞は、その意味を拡張させることがある。次の例を見てみよう。

- (2) a. She **fanned** herself with a handkerchief.
b. Fire is **fanned** by the wind until it leaps up fiercely.

(2)の下線部は、「扇」という意味の名詞 *fan* を名詞転換動詞にしたものである。元々は、「扇で扇ぐ」という意味になるのだが、(2)のそれぞれの例文では少し意味が拡張されている。(2a)では *with* 句で扇ぐものを指定しているため、「扇で」という情報が消えて「道具で扇ぐ」という意味になっている。(2b)は「風によって火が煽られている」という状況を表した文であり、もはや風を発生させる道具はなく、「風が何かに吹き付ける」というくらいの意味になっている。

本稿の目的は、名詞転換動詞の意味拡張現象を分析し、そのメカニズムの一部を明らかにすることである。第2節では、分析に使用するクオリア構造と生成語彙意味論における項構造を導入し、本稿の議論に関係する先行研究を取り上げる。第3節では、先行研究の分析を参考にしつつ、名詞転換動詞の意味拡張の傾向を指摘する。最後に、第4節で本稿の分析の結論を述べる。なお、本稿では分析する対象をクオリア構造の目的役割を用いて

意味を形成したと考えられる名詞転換動詞に限定する。

2. 先行研究

本節では、まずクオリア構造について導入し、その後クオリア構造を用いた名詞転換動詞の分析について取り上げる。次に生成語彙意味論における項構造を導入し、動詞の意味拡張を生成語彙意味論の視点から論じた先行研究を取り上げる。

2.1. 名詞のクオリア構造

クオリア構造は、Pustejovsky (1995)で提案された意味表示である。次の(3)は Pustejovsky (1995)におけるクオリア構造の説明である。

(3) CONSTITUTIVE : the relation between an object and its constituent parts;

FORMAL : that which distinguishes it within a larger domain;

TELIC : its purpose and function;

AGENTIVE : factors involved in its origin or “bringing it about”

(Pustejovsky 1995: 76)

クオリア構造は、構成役割 (Constitutive Quale)、形式役割 (Formal Quale)、目的役割 (Telic Quale)、主体役割 (Agentive Quale) の4つから成り立つ。構成役割は、そのものがどのような部分や素材から成り立っているかに関する知識が記載される。形式役割は、主にものがどのような種類のものに属するかに関する知識が記載される。目的役割は、そのものの機能や使用方法に関する知識が記載される。主体役割は、そのものがどのように生み出されたかに関する知識が記載される。具体的な例を見てみよう。

(4) C: flour, water, yeast, salt

F: food

T: eat

A: bake

(Jezek 2016: 91)

(4)は、bread のクオリア構造である。C は構成役割を意味し、そこに記載されている flour や water、yeast、salt はパンを構成する要素になっている。F は形式役割を意味し、パンが food という種類のものであることが示されている。T は目的役割を意味し、パンは食べるためのものなので、eat という情報が記載されている。A は主体役割を意味し、パンは bake されることによって出来上がるので、bake という情報が記載されている。

目的役割に記載される機能や使用用途、そして主体役割に記載される作成方法や発生の仕方といった情報は、動きを伴うものである。したがって、目的役割と主体役割には、動詞のような情報が記載されることになる。

2.2. クオリア構造を用いた名詞転換動詞の意味分析

影山 (1999)では、一部の名詞転換動詞の意味形成に、名詞のクオリア構造が関与していると分析している。

- (5) a. She **combed** her hair.
 b. He **bandaged** his ankle.

(影山 1999: 84)

(5a)は comb が動詞として「櫛で溶かす」という意味で、(5b)は bandage が動詞として「包帯を巻く」という意味で用いられている。この「梳かす」や「巻く」という行為は、名詞 comb や、名詞 bandage の本来的な目的や機能である。そして、そうした情報はクオリア構造の目的役割に記載される情報である。したがって、こうした名詞転換動詞の意味は、元の名詞の目的役割を利用して作られていると考えることができる。

また由本・影山 (2011)では、クオリア構造の目的役割以外の役割も名詞転換動詞の意味に用いられることがあると分析されている。

- (6) a. 構成役割関与 **skin** the apple (由本・影山 2011: 199)
 b. 形式役割関与 **powdered** green tea (由本・影山 2011: 197)
 c. 主体役割関与 Suddenly it began to **{rain/snow/hail}** when I was jogging.

(由本・影山 2011: 198)

(6a)は構成役割、(6b)は形式役割がそれぞれ関与していると分析されている。ただし、名詞のクオリア構造における構成役割と形式役割には、基本的に動詞の情報は記載されない。そのため、構成役割や形式役割が関与する場合は動詞の意味情報を補充することになる。(6c)で利用されている主体役割については、発生や誕生に関する情報であるので、動詞の意味情報が記載されることになる。その名詞の主体役割の情報を、名詞転換動詞の意味情報にそのまま用いることになる。

本稿では、ここまで見てきたような名詞のクオリア構造が名詞転換動詞の意味の形成に関与しているという立場で、名詞転換動詞の意味拡張を論じる。

2.3. 生成語彙意味論における項構造

生成語彙意味論では、項構造の中に現れる項を次のように分類している。

- (7) a. **True Argument:**
syntactically realized argument of the lexical item;
- b. **Default Argument:**
argument which participates in the logical expressions in the qualia, but which is not necessarily expressed syntactically;
- c. **Shadow Arguments:**
argument which is semantically incorporated into the lexical item. They can be expressed only by operations of subtyping or discourse specification;
- d. **True Adjunct:**
argument which modifies the logical expression as part of the situational interpretation, but is not an argument to the relation proper.

(Pustejovsky and Rumshisky 2010: 11)

(7a)の True Argument とは文を作る際に、主語や目的語として、文の中に現れる項のことである。次の例を見てみよう。

- (8) John arrived late.

(Pustejovsky 1995: 63)

主語として表現されている John は到着する人であり、動詞 arrive が「到着する」という意味で用いられる場合には主語として現れる。こうした文の中で表現される項のことを True Argument と言う。

次に(7b)の Default Argument とは、クオリア構造の情報内では論理的に必要とされる項であるが、文にする際には必ずしも文の中に現れるとは限らないものである。次の例を見てみよう。

(9) John built the house out of bricks.

(Pustejovsky 1995: 63)

(9)の英文では、out of bricks という形で Default Argument が表現されている。このような建物を建てる時の素材や材料に関する情報は、動詞 build を使って文を作る際には必ず表現しなければならないというものではない。しかし何かを build するためには素材や材料は必須のものである。動詞の動作に必須であるが、表現される必要のない情報なので、brick のような素材や材料に関する情報は動詞 build の Default Argument であると言える。

(7c)の Shadow Argument とは、語彙項目の中に意味的に入り込んだ項である。名詞転換動詞は基体となる名詞から派生されたものであるので、基体名詞に関する情報は、名詞転換動詞のクオリア構造の中に記載されることになる。さらに、基体名詞は基本的に、文の中で表現されることはない。したがって、基体名詞は Shadow Argument ということになる。Shadow Argument は特定化などの操作で文の中に現れることもある。次の例を見てみよう。

(10) Mary buttered this toast with an expensive butter.

(Pustejovsky 1995: 64)

(10)の動詞 butter は名詞転換動詞で「バターを塗る」という意味である。本来動詞の意味に含まれる butter は Shadow Argument であるので、文の中で独立して表現されることはない。しかし(10)では、expensive という形容詞によって、どのような butter であるかが特定されているので、独立して表現されることが可能になっている。

(7d)の True Adjunct とは、いわゆる付加部のことであるが、これは特定の語彙項目と意味的に結びついているわけではない。次の例を見てみよう。

(11) Mary drove down to New York on Tuesday.

(Pustejovsky 1995: 64)

(11)の英文において、on Tuesday はいつこの出来事が起こったのかを理解するのに、必要なものである。つまり、この文の意味を理解する上で必要な要素である。しかし、これまで見てきた語句とは異なり、動詞 *drive* の意味を規定するには関係のない語である。こうした語句のことを True Adjunct と言う。

本節では、生成語彙意味論における項の種類について説明を行った。2.4 節では、この項に対する考え方をを用いて動詞の意味拡張を扱った Pustejovsky and Rumshisky (2010)を取り上げる。

2.4. Pustejovsky and Rumshisky (2010)の動詞の意味拡張に関する分析

Pustejovsky and Rumshisky (2010)では、動詞の意味拡張の過程について、項構造とクオリア構造を用いて、次のような主張をしている。

- (12) a. generalizing the type of the argument of the predicate;
b. changing the argument structure and relative prominence of arguments;
c. and finally, abstracting the core meaning of the verb itself.

(Pustejovsky and Rumshisky 2010: 2)

Pustejovsky and Rumshisky (2010)は、*motion predicates* と *locative relation predicates*、*change-of-state predicates* に対象を絞って動詞の意味拡張を扱った論文である。名詞転換動詞も動詞の一種であることから、この分析は名詞転換動詞にも同様に当てはまると考えられる。本稿は名詞転換動詞を対象にしているため、ここでは Pustejovsky and Rumshisky (2010)で挙げられている名詞転換動詞 *anchor* の意味拡張の説明を取り上げる。

(13) a. The boat was anchored several hundred yards offshore.

- b. The lid was anchored to the sides by screws.
- c. Germany is now firmly anchored within the European Union.
- d. A constitution must be anchored in the idea of universal citizenship.

(Pustejovsky and Rumshisky 2010: 17-18)

(13a)は「その船は数百ヤード沖に停泊されています」という意味で、*anchor*が文字通りの「碇をおろして、船を固定する」という意味で用いられている。(13b)は「そのふたは、両側をねじで止められている」という意味であり、ここでは*anchor*は元々の名詞である*anchor*の意味が薄まり「～を使って、…を固定する」という意味で用いられている。(13c)は「ドイツは現在、EU にしっかりと位置付けられている」という意味であり、元々の「固定する」という意味を残しつつも、かなり意味拡張が進んでいる。さらに(13d)は「憲法は、普遍的市民権の思想に根差したものでなければならない」という意味であり、ここでの*anchor*は「～が…に根差している」くらいの意味で用いられており、文字通りの意味との類似を捉えた比喩的な拡張をしているものである。(13d)では、実際に固定する動作は起こっておらず、実際の動作を抽象化した意味となっている。

まず(13a)のように意味拡張する前の *anchor* の項構造とクオリア構造について、Pustejovsky and Rumshisky (2010)では、次のようなものであると主張している。

- (14) a. 文字通りの意味での *anchor* のクオリア構造

F: connected (y, z)

A: attach (x, w, z)

- b. 文字通りの意味での *anchor* の項構造

ARG1 = x: human

ARG2 = y: boat

D-ARG1 = z: location

S-ARG1 = w: anchor

(Pustejovsky and Rumshisky 2010: 17)

クオリア構造内の役割は、品詞ごとに記載される情報が異なる場合がある。(4)で取り上げた名詞のクオリア構造とは異なり、動詞の場合は主体役割 (Aggentive Quale)には動作に関する

る情報が記載され、形式役割 (Formal Quale)には状態に関する知識が記載される。したがって(14a)では、取り付ける動作が主体役割に入り、取り付けた結果の繋がれた状態が形式役割に記載されている。なお、(14a)の横にある括弧内のアルファベットはクオリア構造内の項を意味しており、主体役割は ‘[x] attach [w] to [z]’ と読み、形式役割は ‘[y] is connected to [z]’ と読む。なお、[w] [x] [y] [z]は、項構造内のアルファベットとリンクしているので、項構造内の情報をクオリア構造に当てはめていくと、主体役割は ‘[human] attach [anchor] to [location]’ となり、形式役割は ‘[boat] is connected to [location]’ となる。

(13b)の例では、*anchor* ではなく「*screw* で止める」という意味になっており、元々の意味から拡張が起きている。Pustejovsky and Rumshisky (2010)では(12a)で見たように、意味拡張の初めの段階である(13b)のような動詞の意味拡張は、動詞の項構造の選択制限が弱まっているために起こると説明している。すなわち、(13b)のような場合は次のようなクオリア構造と項構造を持つとしている。

(15) a. 意味拡張後の *anchor* のクオリア構造

F: *connected* (y, z)

A: *attach* (x, w, z)

b. 意味拡張後の *anchor* の項構造

ARG1 = x: T

ARG2 = y: phys

D-ARG1 = z: phys

S-ARG1 = w: connector (y)

(Pustejovsky and Rumshisky 2010: 18)

意味拡張において、クオリア構造は一切変化しない。しかし、項構造は[x]が[人]から[Top Type]に変化し、[y]が[船]から[具体物]に、[z]が[場所]から[具体物]に、[w]が[碇]から[接続するもの]にそれぞれ変化している。

先の(13c)と(13d)で挙げた例文には、Pustejovsky and Rumshisky (2010)は次のような説明をするにとどめている。(13c)の文では、[abstract]にまではならないが、[y]と[z]がさらに弱められている。さらに、[z]は[location]として True Argument となっている。(13d)に関しては、[y]と[z]が[abstract]になっている。

この説明をもう少し例文に沿って考えてみよう。(13c)の文では、[固定される物]を記載する項の[y]が Germany という[国]になっている。また[固定される場所]を記載する項の[z]が EU という[組織]になっている。そして、その項構造[z]に記載されている[場所]の情報が項として文の中に表現されている。さらに(13d)で取り上げたような意味拡張については、概ね(13b)と同じ項構造であるが、[y]と[z]が[abstract]、すなわち、[抽象物]になると分析している。

ここまで取り上げてきた Pustejovsky and Rumshisky (2010)の分析は動詞の意味拡張の1つの側面を捉えたものであるが、次節で指摘するように、名詞転換動詞の意味拡張に関しては、項の選択制限の緩和だけでは説明できない例も存在する。次節では Pustejovsky and Rumshisky (2010)を基礎に意味拡張の側面を説明する。

3. 名詞転換動詞の意味拡張の分析

本節では、Pustejovsky and Rumshisky (2010)で明らかになった事実に加え、名詞転換動詞の意味拡張を説明するのに必要な側面を指摘する。本節ではまず、主に外部表示について扱い、Pustejovsky and Rumshisky (2010)で指摘されている項の選択制限の緩和を名詞転換動詞に関しては2つの段階に分ける必要があることを主張する。次に、名詞転換動詞の意味に含まれる基体名詞から受け継いだ目的役割の一部が意味拡張時に消失することがあるという点を指摘する。

3.1. 外部表示による拡張に代表される Shadow Argument のみの一般化

外部表示は、名詞転換動詞の項構造の中に入り込んでいる基体名詞の情報を弱め、具体的に動作に関与するものを指定する⁽¹⁾。次の例を見てみよう。

- (16) a. I took up my fan, and I fanned myself.
b. She fanned herself with a handkerchief.

(16a)では、「扇」という意味の名詞 fan が転換動詞化して、「扇で扇ぐ」という意味にあっている。一方で(16b)では、外部表示 with a handkerchief によって「扇で扇ぐ」の「扇で」という扇ぐ道具に関する指定が緩和され、意味拡張が起きている。Pustejovsky (1995)では、

元々の名詞は、転換動詞の **Shadow Argument** に記載されると分析されている。この例では、**Shadow Argument** に記載されている [fan] の情報の指定が緩和されたものと考えられる。注目したいのは、**True Argument** に関しては項選択の緩和が起こっていないことである。(16) の例では、主語として [扇ぐ人] が示され、目的語として [扇ぐ対象] が示されている。つまり、外部表示による意味拡張の場合には **Shadow Argument** のみの選択制限の緩和だけでよい場合もあるということである。(13b) で見たような **True Argument** の情報まで変化するのは、こうした **Shadow Argument** のみの拡張の一步先の現象であると考えられる。つまり、普通の動詞とは異なり、名詞転換動詞の意味拡張に関しては(12a)の段階が次のように分解されることになる。

- (17) a. generalizing the type of the shadow argument;
- b. generalizing the type of the other argument of the predicate;

また、外部表示がない例でも、(17) で示したような **Shadow Argument** のみの一般化が起きることがある。次の(18)を見てみよう。

- (18) She picked up a copy of *American Landscape* magazine and fanned her face.

(18) では外部表示ではなく、先行文脈で **Shadow Argument** であるはずの [fan] を打ち消している。この場合も、主語と目的語として現れている項の種類は変わらず、**Shadow Argument** のみが一般化されている。こうした例は、具体的に扇ぐものを示す方法が先行文脈であるという点を除いては、外部表示を用いた意味拡張と変わらない。

他の名詞転換動詞でも確認してみよう。ここでは、名詞転換動詞 **butter** について考察する。

- (19) a. Mary buttered her toast.
- b. Mary buttered her toast with margarine.

(Pustejovsky 1995: 65)

(19) は **Shadow Argument** の subtype に当たる語が文の中に表れる例として、Pustejovsky

(1995)で取り上げられたものである。それぞれ(19a)は「メアリーはトーストにバターを塗った」という意味であり、(19b)は「メアリーはトーストにマーガリンを塗った」という意味である。しかし、マーガリンは *butter* の一種ではない。この(19b)は、塗るのに使われているのが *butter* の一種ではないという点において、文字通りの意味で名詞転換動詞 *butter* が用いられている例ではないと、本稿では考える。そこで本稿ではこの例も意味拡張の一種と捉える。そしてこの例においても、*Shadow Argument* 以外の項に関してはその性質が維持されている。

本節では、名詞転換動詞の意味拡張プロセスを明らかにする目的においては、Pustejovsky and Rumshisky (2010)で示されている意味拡張過程の1つを分解する必要があることを論じた。続く3.2節では、意味拡張の際に項だけでなく、動詞としての情報も変化している例を取り上げる。

3.2. 動詞の一部情報の漂白

名詞転換動詞が意味拡張した例の中には、項だけではなく動詞の意味の一部が漂白してしまっていると考えられる例もある。次の例を見てみよう。

(20) The wind fanned the flames and they quickly spread.

(20)は、「風が火を煽り、火がすぐに広がった」という意味である。本来、名詞転換動詞 *fan* は「*fan* を扇いで、風を起こす」という意味のはずである。この例では、その風を起こす「扇ぐ」という動作の部分が動詞の意味から消えてしまっている。またここでの *the wind* は人間が起こしたのではなく、自然に発生する風であり、扇ぐ動作は実際にあったのだが背景化されているという例とは異なる。なお、こうした人間の基体名詞の指示物への働きかけの部分が意味拡張の際に消える例には、次のようなものもある。

- (21) a. I hammered the metal flat.
b. The rain hammered on the roof of the bus.

(21a)の例は、「私はその金属を平らになるまでハンマーでたたいた」という意味である。一方で、(21b)の例は「雨がバスの屋根をたたいていた」という意味である。自然現象は人

間が起こすものではないので、人の hammer や hammer に代わるものに対する働きかけの情報が漂白していると考えられる。しかし、(20)と(21)の例には若干の違いがある。(20)の例では元々の扇ぐ動作でも「風」は発生しており、それが意味拡張した際に主語として現れた例である。一方で(21)の例では「雨」は元々のハンマーで叩く動作には関与しないものが、意味拡張をした際にハンマーの代わりに導入され、主語として現れている。この点において、両者には違いがある。

こうした働きかけの情報が漂白する現象は、動詞の意味が抽象化している例にも観察される。

- (22) a. They had tobogganed there many times, but it had always been daylight and the air had been loud with shouts of other children.
- b. The price of lots tobogganed.

ここで名詞転換動詞になっている toboggan とは、その一種である。(22a)では「彼らはそこで、toboggan を使って何度も滑り降りた」という意味であるが、(22b)は「地価が急落した」という意味になる。(22a)の意味では「They が toboggan を使う」という toboggan への働きかけがなければ、「滑り降りる」という動作が起きない。一方で、(22b)では現実世界での動作ではなく「滑り降りるような動き」を意味しており、(22a)で必要とされるような働きかけは意味として含まない。このように、動詞の意味が抽象化した場合においても、この働きかけの情報の漂白は観察できる⁽²⁾。

この現象は、Pustejovsky and Rumshisky (2010)の意味拡張プロセスに組み入れるとすれば、どの段階に置かれるだろうか。(20)が動詞の意味が抽象化する前の例であることを考えると、(12b)の前後の段階で起こると考えるのが妥当である。ただし、この現象はすべての名詞転換動詞の意味拡張に観察できるものではない。そのため、これは何らかの条件を満たす名詞転換動詞に限られた現象であると考えられる。

最後に、この漂白される情報の共通点を指摘する。本稿で挙げた例は名詞の目的役割を利用して、転換動詞の意味形成を行ったと思われるものである。そのため、ここまで挙げた例で漂白する情報は元々、基体名詞の目的役割の情報であると考えられる。Pustejovsky (1995)では目的役割を次の2種類に分けている。

- (23) a. PURPOSE TELIC
something which is used for facilitating a particular activity
- b. DIRECT TELIC
something which one acts on directly

(Pustejovsky 1995: 99)

これまでに漂白すると指摘してきた情報は、人が基体名詞の指示物に働きかけをする情報であった。(23)で取り上げた Pustejovsky (1995)によれば、漂白しているのはすべて目的役割の情報のうち、Direct TELIC の情報であると考えられる。

4. 結論

本稿では、名詞転換動詞の意味拡張に関して、その拡張過程の特徴を指摘した。本稿では、Pustejovsky and Rumshisky (2010)において指摘されている項の選択制限の緩和が起こる際に、名詞転換動詞の場合は Shadow Argument からその他の項へと進むと主張した。そして、拡張が進むにつれて動詞の一部情報が漂白する例があることを指摘し、その漂白する情報は人の基体名詞への働きかけに関する情報であると論じた。また、基体名詞の目的役割に記載されていた Direct TELIC に相当する情報である可能性を示唆した。

最後に本稿の議論の問題点を述べる。確かに Pustejovsky and Rumshisky (2010)の分析では(12c)で示したように、動詞の意味が最終的に抽象化するということは指摘されているが、どのような過程を経て抽象化するのかについては詳しく論じられていない。また、こうした意味情報の漂白については論じられていなかった。本節では名詞転換動詞を対象を絞って分析を行った結果、意味情報の一部が漂白していると考えられる例があることを示した。しかし、本節で示した基体名詞への働きかけに関する情報が消えるのは、名詞転換動詞特有の現象であるのか、それとも動詞全般に起こりうる現象であるのかに関しては、慎重に検討していく必要がある。また、情報の漂白を伴う名詞転換動詞の意味拡張に関しては、より多くの用例を対象とし、どのような条件の下で漂白が起きるのかに関する調査を進め、明らかにしていく必要がある。

注

- (1) 影山・由本 (1997)では、語彙概念構造を用いて名詞転換動詞の意味を次のような形で示している。

(i) [x]x ACT ON [y]y BY-MEANS-OF [FAN]z (影山・由本 1997:22)

外部表示を伴う文に関しては、語彙概念構造内にある定項である[FAN]の代わりに外部表示で示される語が入るとされており、実質上の選択制限となっていることを指摘している。これは本稿と同じ事実を記述しているが、影山・由本 (1997)ではその先の意味拡張については触れていない。第 3.1.節の議論で示すように、本稿ではこれを意味拡張過程の 1つと考え、その初期の段階として基体名詞のみの拡張を捉えている。

- (2) 影山 (1999)では、taxi などの乗り物名詞からの転換動詞は、x CAUSE [y MOVE]のように CAUSE を概念構造に持つとされている。語彙概念構造で捉えると、(22b)ではこの x CAUSE の部分が漂白していると考えられる。

参考文献

Jezek, Elisabetta (2016). *The Lexicon: An Introduction*. Oxford: Oxford University Press.

影山太郎 (1999). 『形態論と意味』くろしお出版.

影山太郎, 由本陽子 (1997). 『語形成と概念構造』研究社出版.

Lieber, Rochelle (2010). *Introducing Morphology*. Cambridge: Cambridge University Press.

Pustejovsky, James (1995). *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.

Pustejovsky, James and Anna Rumshisky (2010). Mechanisms of sense extensions in verbs. In GillesMaurice de Schryver (ed.), *A Way with Words: A Festschrift for Patrick Hanks*. Kampala: Menha Publishers.

由本陽子, 影山太郎 (2011). 「名詞が動詞になるとき」, 影山太郎 (編)『名詞の意味と構文』178-207. 大修館書店.